

理学部は今

No.55 July 2025



西オーストラリアでのフィールド体験実習



フィールドナビ



課題研究発表会（自然環境科学プログラム）



新入生歓迎会「お弁当会」を開催（生物学プログラム）

CONTENTS

■学部長メッセージ	2	■研究紹介	8
■令和7年度入学者数	2	■プログラムニュース	10
■理学部後援会の事業報告と事業計画	3	■退任教員紹介	13
■進路内定状況と就職活動支援について	3	■新任教員挨拶	15
■令和6年度卒業生進路状況	4	■科学人材育成事業について	16
■卒業生からのメッセージ	4	■教員の受賞・表彰	16
■在学生の声	7	■これからの行事予定	16

理学部のホームページ <https://www.sc.niigata-u.ac.jp>

発行／新潟大学理学部広報委員会・理学部後援会

理学の力で未来を拓く

理学部長 高澤 栄一



大鳥前理学部長の大学院自然科学研究科長就任に伴い、その後を受けまして4月より理学部長に就任いたしました。本稿を執筆している今、第1タームも終盤を迎えていますが、学生たちは日々の学びや研究に真摯に向き合い、知識と経験を積み重ねながら大きく成長しています。私たち教職員一同も、学生たちが充実した大学生活を送り、将来に向けて確かな力を育んでいけるよう、全力で支援にあたっております。

新潟大学理学部では、理学という自然科学の基盤をなす学問分野を中心に、自然の原理を深く理解し、それを社会へと還元していく力を育む教育・研究を推進しています。基礎科学は一見すると実用性が見えにくい分野かもしれませんが、技術革新や持続可能な社会の実現に向けて、今後ますます重要な役割を果たすことが期待されています。学生たちは、自らの好奇心と向き合いながら、日々の講義や実験、ゼミ活動を通じて、科学的な思考力と課題解決力を培っています。

こうした理学部の教育・研究活動を取り巻く環境も、大きく変化しつつあります。全国的な少子化の進行に伴い、大学全体として志願者数の確保が課題となる中で、とりわけ理学系分野はその傾向が顕著です。また、理学の教育・研究には実験設備や分析機器などの高度なインフラが欠かせませんが、それらの維持・更新には多くの財源と計画的な整備が必要です。さらに、グローバル化や

デジタル化の進展により、社会の求める人材像も変化しつつある中、教育内容や学び方の改革が強く求められています。

こうした課題を新たな成長の契機と捉え、教育・研究両面での改革に積極的に取り組んでいます。教育面では、従来の学問の枠にとらわれず、データサイエンスや異分野融合型の教育を取り入れ、学生がより柔軟に知識を広げていけるカリキュラムを構築しています。また、研究面では、国内外の大学や研究機関との共同研究、地域との連携事業を推進しています。さらに現在、本学が採択された「大学の世界展開力強化事業」の一環として、「インド太平洋地域における仮想フィールドを活用したハイブリッド型フィールド科学人材育成プログラム」を展開しており、グローバルな観点で持続可能社会の構築に貢献できる地球環境のプランナーの育成を目指しています。また、昨年度より開始した中高生対象の科学人材育成事業を通じて、未来を担う人材の育成と大学を取り巻く地域社会の発展に貢献してまいります。

今後も理学部は、理学の力で社会を支えるという信念のもと、教育と研究の質の向上を図り、地域や世界に貢献できる人材の育成に力を注いでまいります。地元の企業様、後援会および同窓会の皆さまには、学生たちの成長の過程を見守っていただくとともに、大学と連携して彼らの学びを支えていただきたいと願っております。

令和7年度入学者数

		理 学 科							計
令和7年度入学者数	新入学	215							215
		数学 プログラム	物理学 プログラム	化学 プログラム	生物学 プログラム	地質科学 プログラム	自然環境科学 プログラム	フィールド科学 人材育成 プログラム	計
令和7年度入学者数	3年次編入学	3	3	1	2	—	1	—	10

注) 令和7年4月1日現在の状況です。

理学部後援会の事業報告と事業計画

令和6年度 理学部後援会事業報告

- 1 定期総会の開催
書面審議（令和6年7月）による開催
- 2 各種事業
 - (1) 学生の課外活動の援助
新潟大学祭への援助
 - (2) 学部教育事業の援助
 - ① 学生研修、実験・実習への援助
 - ② 国際交流関係事業への援助
・世界展開力交流会への援助
・ICNS2024（理学部学生も参加する国際会議）の開催への援助
 - ③ インターンシップ等への援助
 - (3) 卒業祝賀会の援助
 - ① 卒業祝賀会（学位記交付式）の開催
令和7年3月24日（月） ANAクラウンプラザホテル新潟
 - (4) その他
「理学部は今 第54号」令和6年7月発行

令和7年度 理学部後援会事業計画

- 1 定期総会の開催
書面審議による開催を予定
- 2 各種事業
 - (1) 学生の課外活動及び福利厚生への援助
 - ① 大学祭に対する援助
 - ② 理学部A1棟改修事業における学習環境整備への援助
 - (2) 学部教育事業の援助
 - ① 学生研修、実験・実習への援助
 - ② 国際交流関係事業への援助
 - ③ インターンシップ等への援助
 - (3) 卒業祝賀会の援助
令和8年3月23日（月） ANAクラウンプラザホテル新潟
 - (4) その他
「理学部は今 第55号」令和7年7月発行予定
- 3 理事会の開催
6月下旬に書面審議による開催
12月下旬にZoomによるオンライン会議を予定

進路内定状況と就職活動支援について

昨年度の卒業生進路状況は次ページの表「令和6年度卒業生の進路状況」の通りで、6割強が大学院に進学し、3割強が会社員や公務員・教員として就職しました。プログラムごとの内訳など詳細は、理学部HP内「就職・進路支援」項目中「卒業生の進路」のページにも掲載しています（<https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/guid/gen.html>）。就職率は、下表「理学部就職率」のとおり、おかげさまで昨年度も100%でした。

理学部では、学生が社会人としての目標を立て、必要な能力を身に付けるための教育（キャリア教育）にも力を入れています。昨年度までは対面式のイベントを幾つも開催してきましたが、情報提供を主たる目的とした会については、昨今の学生さんの行動様式とニーズに合わせて、ネット活用によるオンデマンド形式に変更しました。詳細は、理学部HP内「就職・進路支援」項目中「就活・進学情報」のページ（https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/edu/career_education.html）をご参照ください。

一方、直接の情報交換が効果的なイベントについては、対面式で開催しています。その一つは、『理工農合同キャリアガイダンス』で、従来理学部単独で行ってきた企業等の人事担当者との面談イベントを、昨年度からは工学部農学部と合同により規模を拡大して7月下旬に開催しています。今年度も約40の企業・事業所等にご参加いただき、2日間にわたって開く予定です。もう一つの対面式イベントは、長年にわたって継続している『理学部コロキウム』です。年8回の開催のうち、6回は理学部教員が自身の研究についての講演を、夏と冬の2回は企業等で活躍している理学部出身者の講演を行っています。今年度か

らは、学生さんへのキャリア教育としての位置付けを強化するため、研究者になるモチベーションについてもお話しいただくことにしました。また、理学部就職・進路指導委員会の共催とすることで、学生さんの参加を促進する体制を整えました。開催内容の詳細は、理学部HP内「研究活動」項目中「理学部コロキウム」のページ（<https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/res/next-colloq.html>）をご参照ください。

キャリア教育に関する理学部開設の実習授業として、就業体験ができる『インターンシップ特別実習』があり、今年度も16の企業・事業所のご協力のもと開講しています。また講義授業としては、企業などの研究者・技術者による実践的講義である『科学・技術と社会』および『新素材の物性』などがあります。

学部開設授業科目以外の各種イベントは、理学系の大学院生も対象としています。なお大学院生へのキャリア形成支援は、新潟大学PhDリクルート室のHPでも参照下さい。（<https://www.phd.niigata-u.ac.jp/about/>）。大学院生には、特に研究者としてキャリアを積むための様々な技能の習得についても支援が行われています。このように次世代の研究者養成も理学部の大切なミッションです。

以上のように、基礎科学を理学教育の基盤としながらも、社会実践的な教育研究にも注力することで、学生が将来社会で果たす役割について深く考える機会を設けています。キャリア教育を通じて、学部卒で就職する場合、修士号や博士号を取得して就職する場合のそれぞれについてキャリアパスを構築できるように、引き続き様々な支援を続けてまいります。

（理学部就職・進路指導委員会委員長 長束 俊治）

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
就職率	98.8%	98.8%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
就職内定者／就職希望者	85名/86名	84名/85名	93名/93名	85名/85名	78名/78名	67名/67名

理学部就職率



令和6年度卒業生進路状況

学部	数学プログラム	物理学プログラム	化学プログラム	生物学プログラム	地質科学プログラム	自然環境科学プログラム	フィールド科学人材育成プログラム	理学部
進学	27	25	26	20	15	11	11	135
教員（含む非常勤）	9	0	0	0	1	0	0	10
公務員	2	2	2	0	2	2	2	12
民間企業	食品・飼料	0	0	0	1	0	0	1
	繊維・化学・石油	0	0	0	0	0	0	0
	電力・ガス	0	0	0	0	0	0	0
	製薬・医療	0	0	0	0	1	0	1
	建設・建設材料	0	1	2	0	1	2	8
	金属・機械	0	1	0	0	1	0	2
	電気・精密機械	1	1	0	1	1	0	4
	情報・通信	4	4	5	1	1	0	15
	印刷・出版	0	0	0	0	0	0	0
	商業・サービス	0	1	3	1	1	2	8
	金融・保険	1	0	1	0	1	0	3
	教育学習支援	2	1	0	0	0	0	3
	運輸・その他	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	1	2	0	0	2	2	9
合 計	48	37	41	24	24	20	17	211



卒業生からのメッセージ

自分らしい4年間

数学プログラム 渡辺 陽帆

高校時代の、数学が好きだから大学でも続けたいという考えで、地元の新潟大学に進学し、4年の月日が経過しました。自分の興味・関心があるものにひたすら熱中し続け、様々な経験ができた充実した日々だったと感じています。

大学での数学は、抽象的な概念が多く、1人で考えることは勿論、仲間と議論を繰り返したり、理解しやすい専門書を探したりと、必死に食らいついていく毎日でした。学部後半には、何度考えても理解できずに丸暗記で乗り切っていた部分が、急にイメージできることも多くなりました。何か月も経ってから何の前触れもなくひらめいた時は、とても感動的でした。4年次のゼミでは、学生同士で発表や議論を重ね、先生や先輩から誤りを細かく丁寧に教えていただき、知識は勿論、論理的思考力や数学書を読む力など、数学的な能力がさらに高まったと実感しています。

学業以外にも、準硬式野球部で目標としていた全国大会に出場

し仲間と香川県へ行ったことや、アルバイト、旅行など様々な事を経験できました。新型コロナウイルスの影響で制限がある時期もありましたが、その中でも自分のやりたいことに邁進し、とても充実した学生生活を送ることができたと思います。

卒業後は大学院に進学します。これまで培ってきた知識や論理的思考力を活かして、今まで以上に研究活動に励んでいきます。4年間、本当にありがとうございました。



大学生活を振り返って

物理学プログラム 山本 唯都

私は2021年4月に新潟大学に入学しました。当時はまだ新型コロナウイルスによる影響が大きく、大学に通うことができません。家でオンライン授業を受ける日々が続きました。想像していた大学生活とは違うスタートではありましたが、アルバイトや2年生から増えていった対面授業で他の学生とも積極的に交流することができて、あっという間で充実した4年間でした。

私はこの4年間で自分が最も成長できたと感じることがあります。それは、「人に相談する勇氣」を持てたことです。大学に入ると、様々な悩みが増えていきました。例えばお金、勉強、将来への不安などについての悩みです。私は幼いころから自分一人で悩みを抱えてしまう性格で人に自分の弱さを見せることに抵抗がありました。しかしある時限界を迎え、勇氣を出して親や大学の相談室等に自分の抱えている悩みを包み隠さずに話してみました。

た。すると、相談するだけでも悩みが小さくなったり、悩みが悩みでなくなったりすることに気づきました。それは、自分がそれまで気づかなかった問題解決のための選択肢が実はたくさんあったことに気づかせてもらったからだと思います。

私の大学生活はこれまでに以上で周りの方々の支えがあって成り立っていたと強く感じます。皆様、本当にありがとうございました。自分が社会に出てもたくさんの困難があると思いますが、大学生活で学んだことを生かして自分なりに頑張っていきたいと思います。



私の4年間

化学プログラム 青谷 静流

このメッセージを書き始めるにあたって、入学当初から順番に思い出してみました。思い出はたくさんあるのですが書ききれないためいくつかピックアップしてみます。

初めての一人暮らしが始まったコロナ禍真っ只中、入学式は行わずに動画配信のみ、その後も基本的に大学に行く機会が少ない大学1年生でした。このまま大学生活が終わってしまうのではないか、という不安を抱えたまま1年を過ごしたことを覚えています。

2年生が始まりました。所属していたバドミントン部で無事友達にはできましたが、部活と学生実験の忙しさに押しつぶされそうな感覚でした。コロナ禍は終わりを迎えました。

3年生は、私の人生の転機だったと思います。私は将来やりたい研究を探し、外部の大学院に進学することを決意しました。9月頃の事でした。9月以降はTOEICと大学院試験勉強ばかりやっていた記憶があります。

4年生になって、研究室に所属しました。私は研究と勉強の違いを知りました。同時に、私は英語に強く興味を持ち、留学生交流サークルに所属しました。これらの活動のおかげで友達も増え、能動的に新たな知見を得ることで問題を解決する能力を身につけることができました。とても充実した1年でした。もっと早く色々なことを経験しておけばもっと早く自分の好きなことを見つけられたのに、と後悔したこともあります。

後悔しない大学生活を送れるように、やりたいと思ったことはなるべく早くやってみてください。



大学生活で得た経験と成長

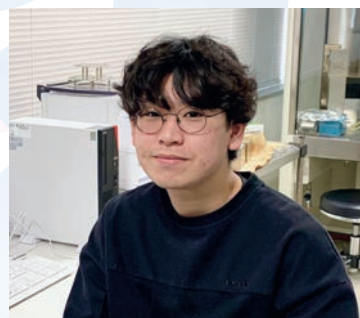
生物学プログラム 坂上 紘也

4年間の大学生活を振り返ると、数えきれないほどの貴重な思い出が溢れ出します。入学当初は、新しい環境に戸惑いながらも、未来への期待で胸が膨らんでいました。初めて受けた講義や、未知の分野に触れることの新鮮さは、毎日を刺激的で充実したものにしてくれました。勉強だけでなく、大学生活全体が、自分を成長させるための大きな土台となったことを実感しています。

特に印象に残っているのは、研究室での活動です。実験を通じて手を動かし、仲間たちと活発に議論を交わしながら、研究課題に没頭する日々は、自己成長を実感できる貴重な経験となりました。思い通りの結果が得られなかったり、データを深く考察するための知識が不足していたりと、さまざまな課題に直面しましたが、それらを乗り越えようとする姿勢は、「この問題をどう解決するか?」という思考を養うことに繋がり、社会に出てからも役

立つ力となったと感じています。

また、この4年間で学んだことは知識だけにとどまりません。人との関わり方や、挑戦することの大切さ、失敗を恐れずに前進する姿勢など、さまざまな価値観を学びました。大学生活を通じて、知識やスキルだけでなく、人間的な成長も実感できたことは、今後の人生において大きな財産です。これから新しい道を歩むにあたり、大学で培った経験を糧にし、一歩ずつ前進していきたいと思います。



卒業生からのメッセージ

挑戦と成長の4年間

地質科学プログラム 中村 永愛

コロナ禍の中で始まった大学生活も、ついに終わりを迎えようとしています。振り返ると4年間は奇跡のような出会いの連続でした。思い描いていた大学生活とは異なり、リモート授業が続き、不安な日々を過ごしていました。そんな中、ある講義で地質学と出会い、目の前の地層から数百万年前の環境が読み取れることに驚き、強く惹かれました。

2年生後期からは専門的な授業を受け、フィールドワークにも挑戦しました。もともとインドア派だった私は、最初は屋外での活動に苦手意識を持ち、挫折しかけたこともありましたが、しかし、仲間たちの支えのおかげで困難を乗り越えることができました。3年次には2週間のオーストラリア派遣に参加し、現地でのフィールドワークを経験しました。教授や学生たちと英語で交流しながら学ぶ時間はとても刺激的で、壮大な景色は今でも忘れられません。大好きな英語を活かしたことも、大きな喜びでした。

4年次の課題研究では、古代の海に生息していた三葉虫の形態を研究しました。教育実習や就職活動との両立に悩むこともありましたが、指導教員の支えのおかげで前向きに取り組むことができました。計画性や忍耐力が身につき、社会人としての成長につながったと感じています。

これまで指導してくださった先生方、支えてくれた仲間たち、職員の皆さま、そして家族に心から感謝しています。卒業後は地元三条市の企業に就職し、大学での経験を活かして地域に貢献できるよう努力していきます。



忘れることのない大切な4年間

自然環境科学プログラム 神藤 優希

北海道から新潟に来て早くも4年が過ぎ、卒業を迎えようとしています。この4年間は非常にたくさんの事に挑戦することができ、どれも貴重な思い出となりました。

最初の1年は、コロナ禍で全ての授業がオンラインということに大学生になったという実感があまり湧きませんでした。しかし、2年目以降は徐々に対面の授業も増え、大学生らしい生活を送れるようになりました。特に4年生では則末先生の下で研究を通して海洋学を学んでいく楽しさを知ることが出来ました。研究が忙しくて心が折れそうになることも結構ありましたが、良き研究室の仲間と先生に恵まれその大変さも楽しんで研究生活を送ることが出来ました。

4年間で行ったことのない地域への旅行やマラソン大会、サークル活動など様々な思い出がありますが、その中でも印象に残っているのは新潟大学から長岡駅まで歩いた経験で、残り10kmとかの時にはもう体がボロボロで後悔の気持ちでいっぱいでした。

でも、このような経験は若いうちしかできないと思うのでやって良かったと思います。在校生のみなさんもきっといい思い出になるのでこのような馬鹿みたいな経験をたくさんしてほしいと思います。

春からはメーカーのシステムエンジニアとして頑張る予定で、多くの人が豊かな生活を送れるように貢献したいと考えています。この最高の4年間の思い出を胸に頑張りたいと思います。今まで支えてくれた家族、先生、友達に本当に感謝しています。本当にありがとうございました。



探求

フィールド科学人材育成プログラム 坂井 飛斗

2021年の4月から始まった私の大学生活は、思いがけない形で幕を開けました。コロナ禍で対面授業はほとんどなく、自宅とアルバイト先を往復する日々が続いていました。画面越しに情報を受け取るだけの学びに、想像していた大学生活とのギャップを感じていました。しかし、転機が訪れたのは2年生の後期。フィールド科学人材育成プログラムに配属されたことで対面授業が本格的に再開し、学びの環境が一変しました。さらに3年次には、このプログラムの醍醐味である野外実習が本格始動。実際に野外に出て、さまざまな課題を仲間と協力しながら解決し、机上の学習では得られない知的興奮と達成感を味わいました。3年生の後期からは山岳環境研究室に所属し、地すべりの研究に本格的に取り組みました。観測機器を設置するために、実際に地すべり地へ行き、手動ボーリング機を用いて約12mの掘削作業などを

行いました。このような、大規模なフィールドワークにもたくさん挑戦しました。また、研究を進めていく中で、2024年1月1日に発生した能登半島地震によって、私が暮らす地域は甚大な被害を受けました。この出来事は、防災研究への意識をより強めるきっかけとなりました。卒業後は大学院に進学し、さらなる研究に挑みます。私の研究結果を生まれ育った新潟に還元し、自然災害に強い地域づくりに貢献できるように努めていきます。



在学生の声

「大学」という場

2年 岩間 凜久

私は入学してからの1年間、大学という新たな学びの場に身を移し、様々な体験をしてきたように思います。親元を離れ一人暮らし、自らで履修を組む大学での講義、様々な個性を持った人が集まる管弦楽団での部活動。これらの活動を通してより一層人間的に成長できたように感じます。私の所属する管弦楽団では毎年入学式での祝典演奏を務めており、1年前は聴衆の1人だった私が演奏者として再び入学式に参加できたことをとても感慨深く思います。私は現在自然環境科学プログラムを希望しており、勉強では友人と協力し、部活動にも励みながら、目標である高校の理

科教師になれるように日々邁進していききたいと思います。



大学生活 1年間の振り返り

2年 原田 柚羽

新潟大学に入学して、早くも1年が経ちました。この1年間を通して、自分自身を深く知り、多くの経験を積むことができたと思います。

大学生活の最初の1年は、教養や理学の幅広い分野を学ぶ貴重な時間でした。ここで培った知識や視点は、今後の専門的な学びを支える大きな土台となりました。

そして何より、大学で出会った友人や先輩との交流は、私にとって刺激に満ちたものとなりました。学部を越えて多様な価値観や興味を持つ仲間と過ごす日々は、私の視野を広げ、新しい経

験や素敵な思い出になりました。

迎える2年目は、さらに成長できるよう、明確な目標を持って日々を過ごしたいと思います。大学生という限られた時間のなかで、一瞬一瞬を大切にしながら、自分自身をさらに磨いていきたいです。



大学生になって

2年 渡辺 美咲

大学生活が始まって1年が経ちました。私は幼少期から鉱物に興味があり、いつしか地質学を学びたいと思うようになったのです。大学に入ってから講義や地質科学プログラムの自主ゼミに参加して、現地や室内で岩石を観察する機会がぐっと増えました。どのような姿で岩石が存在するのかを知るために、実際に野外に出て活動することの大切さにも気づかされました。室内にこもりがちだった今までとは対照的に、新鮮で活動的な日々を送っています。

これからも鉱物や岩石に関する専門分野を学び、将来は研究職

に就きたいと考えています。私の関心が数年後にどうなっているかはわかりませんが、将来の夢に向け、幅広く生きた知識を吸収していきたいです。





超長寿昆虫シロアリの王と女王は 如何にして長寿を実現しているのか？

生物学プログラム 田崎 英祐



シロアリというと、家屋を食害する“嫌なヤツ”というイメージを持たれる方も多いかもしれませんが、しかし実は、彼らは驚くほど高度な社会を築き上げる、興味深い昆虫でもあります。私たちはこのシロアリを対象に、「王と女王の驚異的な長寿」の仕組みを研究しています。

シロアリの世界では、巣の中でただ一組の王と女王が子どもを産み、それ以外の大多数は繁殖を行わない働きアリや兵アリとしてコロニーを支えています。驚くべきは、その寿命の差です。働きアリや兵アリが数年の寿命であるのに対し、王と女王は20年、時には50年近く生きることもあります。平均寿命が2ヶ月程度とされる昆虫の中でも、際立った長寿といえるでしょう。なぜ彼らは、これほどまでに長生きできるのでしょうか？その秘密を解き明かすため、私たちはシロアリの生活環境や体内の仕組みを多角的に調べてきました。

まず、シロアリの王と女王は「王室」と呼ばれる巣の奥深くで暮らし、外敵や病気、飢餓といった脅威から徹底的に守られています。採餌や育児、防衛などのすべての仕事は働きアリが担い、王と女王は“守られた存在”として、安全に長く生きられる環境にあります。こうした社会的な防衛システムが、外因的な死亡リスクを下げ、進化的に長寿を可能にしているのです。

また、彼らの体内では“老いにくい”メカニズムが働いています。たとえば、細胞を傷つける「酸化

ストレス」に対して、王や女王は高い抗酸化力を持ち、細胞の劣化を抑えています。DNA修復に関わる遺伝子も高いレベルで発現しており、細胞が長く生存できる仕組みが備わっています。まだ未解明な点は多いものの、こうした恒常性維持の仕組みが複合的に働くことで、寿命の延長に貢献していると考えられています。

さらに、近年の研究で私たちが特に注目しているのが「ロイヤルフード」の存在です。王と女王は自ら木材を食べて消化することができず、栄養はすべて働きアリから受け取っています。働きアリが体内で合成した分泌液を、口移しで給餌するのです。この“ロイヤルフード”には、抗老化作用が報告されているアセチル-L-カルニチンなどの成分が含まれており、長寿を支える重要な要素であることが明らかになってきました。彼らの食と代謝の実態解明は、私たちの研究テーマの柱の一つです。

このように、王と女王の長寿は、社会的に守られた生活、体内の防御機構、特別な栄養、そして巣の環境という多面的な要因によって支えられているのです。私たちの研究は、このような「自然界に存在する長寿戦略」を解き明かすことで、人間を含む他の生物の老化や健康に関する理解にも貢献できると考えています。家を壊す“嫌なヤツ”と思われがちなシロアリですが、実は、生命科学の最前線を拓く鍵を握っているのかもしれません。



見逃されてきた化石種に 新たな価値観を

地質科学プログラム 椎野 勇太



化石は、過去に生きていた生物の痕跡です。風雨にさらされない限り、何年たっても姿を変えずに残り続けます。腐ることもなければ、乾燥して縮むこともありません。そのため研究室や標本庫には、“賞味期限”のない多数の化石標本が手つかずのまま眠っています。私が専門とする腕足動物（二枚貝に似て非なる海洋無脊椎動物）の化石も、生涯を通して研究しきれないほどの標本がしまわれています。

研究室の標本の中には、20年ほど前に採集したディスキナ類という腕足動物の化石がありました。ディスキナ類は、まるでシンバルのような円盤形の2枚の殻を持ち、約4.5億年前のオルドビス紀から現在まで、ほとんど姿を変えずに生き延びてきた最古級の「生きた化石」として知られています。ディスキナ類は、貧酸素な海底環境で密集する事例が多く、化石を使って過去の環境を解読するツールとしても有用視されてきました。しかし、なぜディスキナ類が円盤形を変えずに生きてこれたのかは詳しく研究されていませんでした。

化石の研究は、まず名前（学名）を決める分類学的な検討から始まります。私たちがホモ・サピエンス（*Homo sapiens*）と呼ばれるように、動物の学名は、属名（*Homo*）と種小名（*sapiens*）の2つで構成されています。そこでまず、宮城県気仙沼市に分布するペルム紀（約2.6億年前）および同県

南三陸町に分布する三畳紀（約2.5億年前）の地層から採集した研究室にあるディスキナ類の化石を用いて、学生たちと一緒に分類学的研究に取り組みました。

ペルム紀と三畳紀のディスキナ類は、どちらも *Orbiculoidea* 属の何らかの種だろうと推定されてきました。詳細に形態解析をした結果、これまでに知られていなかった新しい特徴を発見し、ペルム紀の標本は新種 *Orbiculoidea verum*、三畳紀の標本に至っては新属新種 *Bronzoria recta* として報告することができました。特に *Bronzoria* は、ペルム紀の *Orbiculoidea* と現生ディスキナ類の中間的な形態を持つことがわかり、このグループの形が過去2.5億年間を通して不変ではなかったことを捉えた世界初の成果となりました。

化石を扱う古生物学は、究極的には発見の学問です。そこには、フィールドでの新発見もあれば、研究済みだと思われる標本を丹念に見直すことで、思いがけない普遍性が見えてくることもあります。およそ200年前に初めて記載されてから見逃されてきたディスキナ類のように、世界的にも軽視されている古生物は数多く存在します。化石標本を扱う研究は、フィールドワークが好きな本学学生にとって芋づる式に新発見へと繋がる宝の山なのかもしれません。

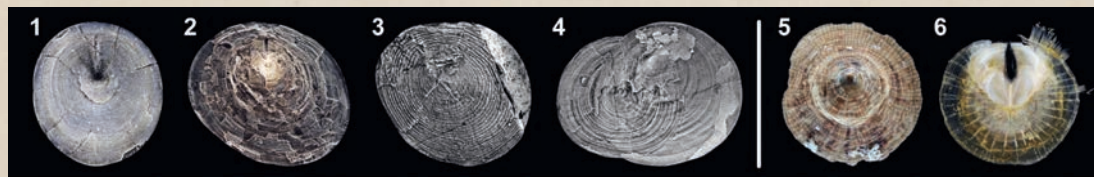


図. ディスキナ類の形態。(1) オルドビス紀 *Acrosaccus gibba* の腹殻。(2) デボン紀 *Orbiculoidea* の腹殻。(3) ペルム紀 *Orbiculoidea verum* の腹殻。(4) 三畳紀 *Bronzoria recta* の背腹殻。(5) 現生種 *Discradisca stella* の背殻。(6) 現生種 *Discradisca stella* の腹殻。

プログラムニュース

数学プログラム

2024年度は、年度を通じて新型コロナウイルス感染症の影響をほとんど受けることなく、学部学生48名（9月卒業含む）、博士前期課程13名、博士後期課程1名が無事に卒業・修了しました。

9月には星明考教授が2回目となる新潟大学優秀論文表彰を受けました。これは国際的に評価の高い学術誌に論文が掲載された著者に与えられるものです。学生の研究も活発に行われており、2025年3月には博士後期課程の小泉晶平さんが新潟大学博士学生支援プログラムシンポジウム 研究ポスター賞 優秀賞を受賞しました。また同時期に、学部学生の下峰溪人さんと博士前期課程の松崎出穂さんが新潟大学学生表彰を受けました。

10月18日には新潟大学創立75周年記念事業の一環として数学教室ホームカミングデーが開催され、当数学教室の卒業生である佐藤浩一氏（日本精機株式会社 代表取締役社長）と古田高士氏（富山大学理学部数学プログラム 教授）から貴重なお話を伺うことができました。11月29日には数学プログラム講演会が行

われ、北澤千秋氏（新潟県立新潟江南高等学校）、田中すみれ氏（糸魚川市立糸魚川東中学校）が講演されました。

本年3月末に蛭川潤一准教授が退職され、南山大学に転出されました。蛭川先生は本学理学部に平成19年（2007年）1月に着任され、以来18年3か月にわたって多大な貢献をされました。ますますのご活躍を祈念致します。



8月のオープンキャンパスでの模擬授業

物理学プログラム

3月末日、原子核理論研究室の松尾正之先生が定年退職され、物性理論研究室の奥西巧一先生が大阪公立大学へ転出されました。両先生が新潟大学に着任されたのは共に2000年で、4半世紀の長きにわたり、学生（学部生・大学院生）への教育と研究の両面でご活躍されました。また、松尾先生は理学部長や自然科学研究科長などの要職も数多く務められ、理学部と研究科（大学院）の改組に多大なご尽力をいただきました。松尾先生の最終講義「核子多体系の集団運動：不安定核から中性子星まで」には卒業生の方々も訪れ、とても盛況でした。

新年度になり4月、物性理論研究室に野垣康介先生が着任されました。若い助教の先生です。物理学教室では、これから5年くらいの間に定年を迎える教員が多いため、今後も人事関係のご報

告が続きそうです。

6月、第23回物理学プログラム・ケルビン祭が開催され、物理学プログラムの成績優秀者の表彰が行われました。写真は表彰者の記念撮影タイムの様子です。なお、賞状と副賞は物理学教室の同窓生の方々のご支援によるものです。また、懇親会の予算の不足分を理学部後援会費の物理学プログラムへの配分から補わせていただきました。同窓生の皆様、および後援会の皆様に心より感謝申し上げます。



化学プログラム

2024年度夏以降の化学プログラムニュースをお伝えします。8月には昨年に引き続きオープンキャンパスを対面にて開催しました。プログラム説明、模擬授業、そして学生による研究ポスター紹介が行われ、大変多くの方にお越しいただきました。2025年度も同様のオープンキャンパスを予定しております。

10月には43名の2年生が化学プログラムに配属されました。例年よりやや多い新配属生を迎えて、化学プログラムの全学年がそろいました。

11月23日には新潟大学創立75周年記念事業の一環で「化学科ホームカミングデー」が初めて開催されました。理学部の校舎見学の後、茶話会が行われました。化学科・化学プログラム卒業生と定年退職された先生方にもご参加いただき、旧交を温める会となりました。

2025年2月から3月初旬にかけて、修士論文、卒業論文の発表会が行われました。今年度から、化学プログラム卒業年度の4年生を対象とした「学業成績優秀賞」が新設されました。本事業は理学部同窓会化学科支部のご協力で、成績優秀者3名に対し賞金を添えて表彰状を進呈するものです。3月の卒業論文発表会において表彰が行われました（写真）。

4月には新年度が始まりました。大学院化学コースは24名の博士前期課程入学者と共に、4年ぶりとなる博士後期課程入学者2名を迎えました。化学プログラムにおける研究の中核を担う大学院生達の活躍を期待しております。



生物学プログラム

多彩な行事が続きました。

2024年9月26～28日には、海外姉妹校との国際会議「ICNS2024」が本学で開催されました。海外の研究者と英語で議論を交わせたことは、参加した学生にとって大きな成長の糧となったことでしょう。同会議では、本プログラムおよび基礎生命科学コースに所属する学生5名が、口頭発表賞とポスター発表賞を受賞しました。

また、同月30日には、生物学プログラム大懇親会（秋の懇親会）が開催され、学部生から大学院生まで幅広い学生が集い、教員とともに和やかな雰囲気の中で歓談し、親睦を深めました。

さらに、2025年2月10日には博士前期課程基礎生命科学コースに所属する12名の修士論文発表会を、12日には理学科生物学プログラムに所属する24名の課題研究発表会を実施しました。

生物学プログラムでは、2024年度後期以降も学生の成長を支える多

そして3月24日には、生物学プログラムと基礎生命科学コースの学位授与式が開催されました。2024年度の卒業生は、新型コロナウイルス感染症による制約が徐々に薄れる中、通常の大学生活へと移行していく過程を経験してきた世代です。今後もさまざまな変化を乗り越えながら、粘り強く挑戦を続けてください。教職員一同、皆様のこれからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

新潟大学理学部系 卒業・修了祝賀会



地質科学プログラム

2024年4月に葉田野希（はたの のぞみ）准教授と柴田翔平（しばた しょうへい）助教の2名が新たに着任しました。葉田野准教授は、地層や土壌を対象に過去の環境とその変動を復元する研究に取り組んでいます。柴田助教は、火山の噴火メカニズムや火山地形の形成過程について研究を行っています。これにより、本プログラムの主担当教員は10名となり、地質学への多様な関心に応えられる教育・研究環境がさらに充実しました。

理学部主導で展開している「大学の世界展開力強化事業」として、2024年度に3回の海外フィールド体験実習を実施しました。北インドではジオツーリズムをテーマに、ヒマラヤの地質や自然環境に触れる体験をしてもらいました。スリランカでは、鉱物採集や宝石学に関する実地体験を行い、フィールドと宝石産業との関りを学びました。オーストラリアでは、日本とは異なる乾燥地帯のフィールドで、過去に大陸が分裂した証拠を観察しに行きました。本事業は2026年度が最終年度の予定ですが、今後も国際的な教育体験を提供できるプログラムとして発展を目指しています。

2024年4月に葉田野希（はたの のぞみ）准教授と柴田翔平（しばた

海外での活動も含め、フィールドワークの様子をまとめた動画の整備も進めています。現在、映像制作の専門家と連携した編集作業を進行中であり、完成次第、皆様に公開できるよう準備を進めております。今後とも、地質科学プログラムの教育・研究活動にご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。



オーストラリアでのフィールド実習

自然環境科学プログラム

自然環境科学プログラムでは、2024年度は20名の卒業生を送り出しました。写真は3月の理学部卒業祝賀会での集合写真ですが、これに先立つ2月13日には恒例の課題研究発表会（前年度から口頭発表のみ）が行われ、各自が1年間取り組んだ研究成果を披露しました。卒業生のうち11名が大学院に進学し、ほか県内外の民間企業及び公務員に就職しました。新大理学部、そして自然環境科学プログラムでの学びを、それぞれが新しい場所・新しい立場で活かしていただくことを大いに期待しています。

2024年9月には、下西隆准教授が“The Astrophysical Journal Letters”誌に発表した論文が、令和6年度新潟大学優秀論文表彰を受けました。下西先生は、2022年の第9回学長賞（若手教員研究奨励）に続く学内表彰となります。大変におめでとうございます。2024年5月には、松岡史郎教授・臼井聡准教授及び則末和宏准教授（当プログラム副担当）らの研究グループの論文の内容が本学ホームページの「ニュース」で紹介され、ま

た同年12月には、宮崎勝己教授が佐渡自然共生科学センター臨海実験所の大森紹仁助教と共同で「第20回棘皮動物研究集会」を主催し（会場は本学物質生産棟）、全国から60名の研究者を集めるなど、各教員が活発な研究活動を展開しています。これらの活動成果は、やがて当プログラムにおける各種教育活動へと還元されていくものと期待されます。

祝 新潟大学理学部系 卒業・修了祝賀会



フィールド科学人材育成プログラム

2024年度は、当プログラムでは17名（農学部と合わせて28名）が卒業しました。また接続する大学院フィールド科学コースでは、修士課程修了者19名（理学8名、学術8名、農学3名）を送り出しました。

教員・学生のフィールド活動はコロナ禍以前に増して活発になってきています。則末准教授は2024年8月下旬～9月下旬に東部インド洋の海洋観測を行い、貴重な海水試料のサンプリングを行いました。モンスーンの影響など大気－海洋相互作用がどのように化学成分に影響を及ぼすのか、今後の展開が期待されます。奈良間教授は、2024年7月に学生5人とキルギス共和国で氷河湖や山岳永久凍土に関する調査、8月にはでケニア山で氷河の質量収支に関する調査を実施し、地球温暖化が進行する中で貴重なデータを取得してきました。野口准教授は2024年8月にアイスランドで火山地質調査を実施し、火星表層/地下浅部環境理解につながる岩石サンプルを採取しました。国内では、本田教授は2024年に地震と豪雨による複合災害に見舞われた能登半島を調

査し、地震による山林被害が水害を増幅させた可能性を確認してきました。

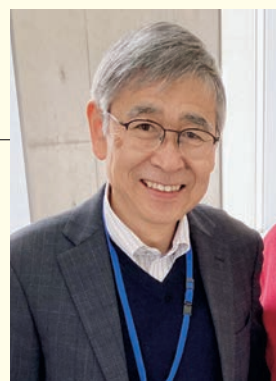
2024年は2年続けて経験のない猛暑だった一方、24/25年冬は各地で記録的な大雪に見舞われるなど、21世紀の地球は気候変動に伴う生態系等の環境変化、複合災害の頻発など激変する自然との共生の道を探る必要があります。災害や環境変化に強い地域社会を次世代に確実に引き継いでいく人材を世の中に送り出す必然性を一層感じています。



能登半島では地震による海岸部の隆起が各地で確認された

新潟大学での25年間

物理学プログラム 教授 松尾 正之



2000年3月に准教授として着任するまでは大学附置共同利用研究所の助手でしたので、学部の科目を受け持ったことがなく、最初の2～3年は授業準備と講義に時間を費やしていたように思います。その授業の一つは「近代物理学史」という科目でした。物理学の歴史を紐解くという難題に面くらいでしたが、一方で、高校時代に読んで私が物理学に惹かれるきっかけの一つでもあった「物理学は世界をどう変えたか」(武谷三男)を思い出し、物理学科生に物理学の魅力を伝えねばと、張り切って準備したことは、着任時期の一番の思い出です。ガリレオとニュートンの時代から、アインシュタインを経てボーア、ハイゼンベルグら物理学の巨星達による量子力学誕生に至る物理学の発展は、今振り返っても本当に魅力的な物語です。この授業の担当は数年で終わりましたが、その後、高校生向けの出前講義「物理学とは何だろうか」に姿を変え、退職の2年前まで延々とほぼ毎年のように講義を続けてきた大好きな授業主題となりました。

湯川秀樹門下の素粒子物理学者である武谷に影響を受けた私は、ミクロの物理学世界の探求に魅力を感じ、大学院で、原子核物理学の理論研究に踏み出しました。助手時代は、ニールス・ボーア研究所に滞在した経験をもとに高速回転する原子核の研究に力を注いでいたのですが、本学に着任した際に、大学院生と共同研究を進めるなら不安定原子核(短寿命同位体)の研究がいいと考え、大きく舵を切りました。当時、理化学研究所は不安核研究のメッカの一つとなっており、また、研究室の大先輩である池田清美先生や鈴木宜之先生がその分野で大活躍され

ていたからです。理化学研究所と本学自然科学研究科の間には連携講座や研究協力協定があり、学生の成長には絶好の研究分野なのです。7名の博士学位取得者を含む多くの大学院生、4年生と一緒に様々な研究を進めることができ、充実した時間をとても楽しく過ごせました。学生の皆さんに深く感謝しています。

さて、2015年に理学部長を拝命することになり、責任の重い多くの課題に対応することになりました。大学予算の逼迫や人事凍結などもありましたが、特に重要だったのが理学部の改組です。理工農3学部の改組と創生学部の設立を同時に行うという大仕掛けである上、単に1学科に変更するのではなくカリキュラム等も大幅に変えるので、理念と実務の双方で課題山積です。前野貢先生(当時副学部長)と一緒に、連日夜遅くまで動きました。対応いただいた各学科の先生方にも深く感謝いたします。

めぐりめぐって、2023年からの自然科学研究科長職では、大学院の改組にも取り組むことになり、改組つながりの不思議な因縁を感じます。少子化やAI技術をはじめ、私が着任して25年間で社会は大きく変わっていますが、新潟大学の使命はますます大きくなっていると思います。皆様のご活躍をお祈りします。



前を向いて歩こう

地質科学プログラム 准教授 栗田 裕司

おかげさまで、令和7年3月末をもって新潟大学を定年退職いたしました。21世紀が始まった2001年4月に採用され赴任した私の在職期間は、24年間になります。この間、学生諸氏・そのご家族様各位、ならびに理学部はじめ各部局の教員の皆様、事務職員・技術職員の皆様にはたいへん多くの支えを頂戴しまして、感謝の念にたえません。ありがとうございました。

24年間を振り返りますと、「迷いの多い年月だったな」という感想がまず最初に浮かびます。19年間サラリーマン技術者だった私は、大学に来たその日にまず感じたのは「違和感」のようなものでした。当初は、まあ3年間くらいすれば慣れるに決まっているよな、と思っていましたが、それはそうではなく、結局退職まで続くものでありました。

私が会社を辞して大学での職を目指したのは、教育に興味があったからです。教育を職業としてやってみてすぐわかったことは、教育事業にとって何が「善」なのかはどこかに決まった答えがあるわけではなく、どれが「善」か、どれが「善でないもの」より少しはマシなものなのかは、自分で判断しなくてはならないという命題です。これが自分には大きな迷いを生むもので、常に自問自答して、迷いに迷って、でも納得のいく答えはそうそうなく、そのまま定年が来ました。それでも、教育は自分の中に蓄積できたものを若い世代に継承する事業だという自分なりの定義を持つことはでき、うまく継承できたと思えたときには、とてもやりがいのあることだと思ったところです。教育に関して学生さんからポジティブな言葉をいただく機会は何度かあり、それはサラリーマン稼業を（いわば）捨てて来た自分には人生の勲章だなあ、とひそかに思っています。

研究面では、新潟とその周辺の自然を解読することに注力しました。自然はこちらが汗をかいて能動的に働きかけつづければいつかはその「しくみ」をちょっと教えてくれます。自分が日々生かされているローカルな環境に強い関心を覚えた私は、そこから自然の「しくみ」を教えてもらえるのは、たいへん楽しいことでした。このような（のんびりしてるかもな）姿勢でやって来れたのは、新潟大学理学部の自由で寛容な気風のおかげだと思います。「自由であることの意味」について、この環境で教わったことは多かったと感じます。

この24年間には、スマホの普及あり、幾度もの震災あり、コロナ禍あり、直近ではAIの普及あり等々の世の中の変化があり、そのスピードは今後ますます加速していくでしょう。大学ではとすると世の中から切り離されすぎて「変わらないほうがいい（昔は良かった、に通ずる）」という旧守的・保守的な考えが支配し、ときにハラスメントが起きたりしがちです。学生・教職員ともどもに世の中との結びつきを深めつつ、前を向いて歩いていく学園として益々発展していけますよう、また皆様のご健康でありますようお願い申し上げます。



新潟県・守門火山を踏査中の筆者（2024年4月）

新任教員挨拶

物理学プログラム 助教 野垣 康介

このたび、新潟大学若手教員スイングバイ・プログラム制度により、2025年4月1日付で理学部物理学プログラムの助教に着任いたしました野垣康介（のがき こうすけ）と申します。私は高校卒業までを兵庫県で過ごし、その後、京都大学にて学部・大学院あわせて9年間学びました。その後、理化学研究所にてポストドク研究員として勤務し、このたび新潟に参りました。

私の専門は物性理論で、物質の性質を理論的に解明する研究に取り組んでいます。私たちの身の回りには多種多様な物質が存在しますが、それらは高々100種類ほどの原子の組み合わせによって成り立っています。物質の性質は、主に物質中の電子のふるまいによって決まりますが、限られた種類の原子の組み合わせから電子に多様な性質をもたらす仕組みを明らかにすることは、理論物理における重要な挑戦的な課題の一つです。私は、スーパー

コンピュータなどの計算機を活用してこれらの問題にアプローチしており、近年は量子コンピュータを用いた研究にも取り組み始めています。様々な観点から根気よく計算を続け、答えに辿り着く喜びは何物にも代えられません。

新潟での生活は私にとってとても新鮮で、毎日を楽しみ過しております。今後は、一人でも多くの人に物理学の素晴らしさを実感して貰えるよう、研究・教育の両面で新潟大学に貢献してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



地質科学プログラム 助教 柴田 翔平

2025年4月1日付で理学部地質科学プログラムの助教に着任しました柴田翔平です。高校卒業までを山形県で過ごし、茨城大学で学部～博士課程、PDとして過ごしていました。日本海側は久しぶりなので、新潟県の美味しい食べ物、お酒を楽しみたいと思います。

専門は火山学で、主に地質学的・物質科学的な手法から、火山の噴火履歴や噴火推移、噴火を引き起こしたマグマの生成プロセスを明らかにする基礎研究を行っています。特に、観測事例のない“カルデラ噴火”についての研究を学生時代から継続しています。人類史上未経験の超巨大噴火がどのように発生し、進行するのか？大量のマグマはどのように作られ、地下に蓄えられるのか？火山に関する未解明の現象はまだたくさんあります。火山周辺のフィールドにおける緻密な地質調査をベースに、様々な

分析手法を組み合わせ研究を進めています。絶滅危惧と言われて久しい火山地質学分野ですが、新潟からその魅力と意義を発信し、盛り上げていければと思います。

新潟大学では、研究室での研究活動や講義を通して、研究という営みの面白さ、自ら問いを立て、検証・思考することの重要性を学生たちに伝えていきたいと思っています。新潟大学に貢献できるよう研究・教育活動、専門人材の育成に尽力していきます。どうぞよろしくお願いいたします。



地質科学プログラム 准教授 葉田野 希

2025年4月に地質科学プログラムの准教授として着任しました葉田野希（はたの のぞみ）です。わたしの専門分野は堆積地質学です。地層や堆積物の成り立ちを読み解くことで、地質時代にどのような環境変動が起こったのか、そしてそれがどのような要因によって生じたのかを明らかにすることを目指しています。特に、古土壌や湖沼堆積物といった陸域の記録を対象に、気候や地形、土壌の変化など、地球表層で起きた変動を探る研究に取り組んでいます。

わたしの来歴をご紹介させていただくと、博士課程までは信州大学松本キャンパスで学び、その後は長野市にある試験研究機関にて、中部山岳域の環境変動と人間活動との関わりに関する研究を行ってきました。今回、新潟大学にご縁をいただき、千曲川の支流・犀川とその源流である北アルプスを望む松本平から、千曲

川が流れる善光寺平、そしてその最下流にあたる信濃川が形づくる越後平野へと、地質的なつながりのある地域を“下流へ、下流へ”とたどってきたように感じています。

新潟は初めて暮らす地ですが、野や山、海と幅広く豊かな自然環境を感じて、日々新鮮な気持ちで過ごしています。今後は、こうした自然のフィールドでの学びを大切にしたい教育と研究を目指し、地質学の研究の面白さを学生や地域の方と共有していけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。





科学人材育成事業について

新潟ジュニアドクター育成塾の実績を活かして、2024年度から、2つの科学人材育成事業がスタートしました。

中谷財団助成の「自然と人を愛し、共生を実現する未来の科学人材育成プログラム新潟(N-Step新潟)」は、リテラシー講座や自然と人講座で学びを深める1年目のチャレンジングステージと、個別課題研究活動を通して探求力を培う2年目のジャンピングステージの、二段階からなる中学生向けの育成プログラムです。2024年度は、2つのプログラムを合わせて34名が受講しました。



液体窒素の実演に目を見張る中学生たち

科学技術振興機構(JST)支援の「自然と人の共生に向け知の革新を創る基礎科学人材育成(にいがた“知の革新”STELLAプロ

グラム N-ψ)」は、地域で卓越した能力と「科学を学びたい」という強い意欲を持った高校生向け育成プログラムです。理数学問や自然科学、AIやRRIの活用、英語力など、将来、高校生が理系大学に進学した際に役立つ基本的知識や研究姿勢を養うことを目的に、1年目のエントリーコース(46名受講)とマスターコース(21名受講)、2年目のドクターコース(2024年度は未開設)の3段階のプログラムから構成されています。

両事業では、ポスターセッションを「学びの集大成」として位置づけ、受講生自らが課題を見つけ、解決策を探る力を身に付けることを共通目標に掲げています。中高生の本プログラムでの学びや体験を通して、教育界と地域社会に貢献して参ります。



地質科学プログラム教員の講義を聴く高校生たち



教員の受賞・表彰

梅林 泰宏 教授(化学プログラム)、星 明考 教授(数学プログラム)、M. Satish-Kumar 教授(地質科学プログラム)、下西 隆 准教授(自然環境科学プログラム)が「令和6年度新潟大学優秀論文表彰」を受けました。

新潟大学優秀論文表彰は、本学研究者の研究意欲向上を図り、新潟大学の研究成果の国際発信力を高めるため、国際的に評価の高い学術誌に論文を掲載した研究者を顕彰し研究費を支援するものです。

墨谷 暢子 准教授(自然環境科学プログラム)が、「第10回 CYTOLOGIA奨励賞」を受賞されました。

CYTOLOGIA奨励賞は、細胞遺伝学分野ならびに細胞生物学分野の将来を担う研究者を奨励するため、平成26年度(2014)に公益財団法人・日本メンデル協会により創設されました。

安東 宏徳 教授(佐渡自然共生科学センター臨海実験所)が、「日本比較内分泌学会小林賞」を受けました。

「日本比較内分泌学会小林賞」は、比較内分泌学に関する貴重な研究をなし、その業績が特に優れた学会正会員に授与されるものです。

田崎 英祐 准教授(生物学プログラム)が、「第11回学長賞(若手教員研究奨励)」を受けました。

学長賞(若手教員研究奨励)は、顕著な研究成果を上げた若手研究者を顕彰し、将来の学術研究を担う優秀な若手研究者の育成及び研究意欲の向上を図り、もって本学の研究水準の向上に寄与することを目的とするものです。

これからの 行事予定

※変更になることがあります。

10月2日	第2学期授業開始
10月11日	理学部総合型選抜
10月	新潟大学WeeK 地質まつり
	サイエンスミュージアム特別開放ほか(未定)
10月	大学祭
11月15日	理学部学校推薦型選抜
12月27日～1月6日	冬期休業

1月17日～18日	大学入学共通テスト
2月25日～26日	一般選抜(前期日程)
3月11日～31日	春期休業
3月12日	一般選抜(後期日程)
3月23日	卒業式・卒業祝賀会
4月	入学式
4月	第1学期授業開始

お問い合わせ
窓口のご案内

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部学務係

TEL : 025-262-6106
FAX : 025-262-6354
Mail : gakumu@ad.sc.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。